

新建築

SHINKENCHIKU:2014

3



気仙沼大谷のみんなの家

設計 Yang Zhao 妹島和世(アドバイザー) 渡瀬正記(ローカルアーキテクト)

施工 鉄建建設 高橋工業

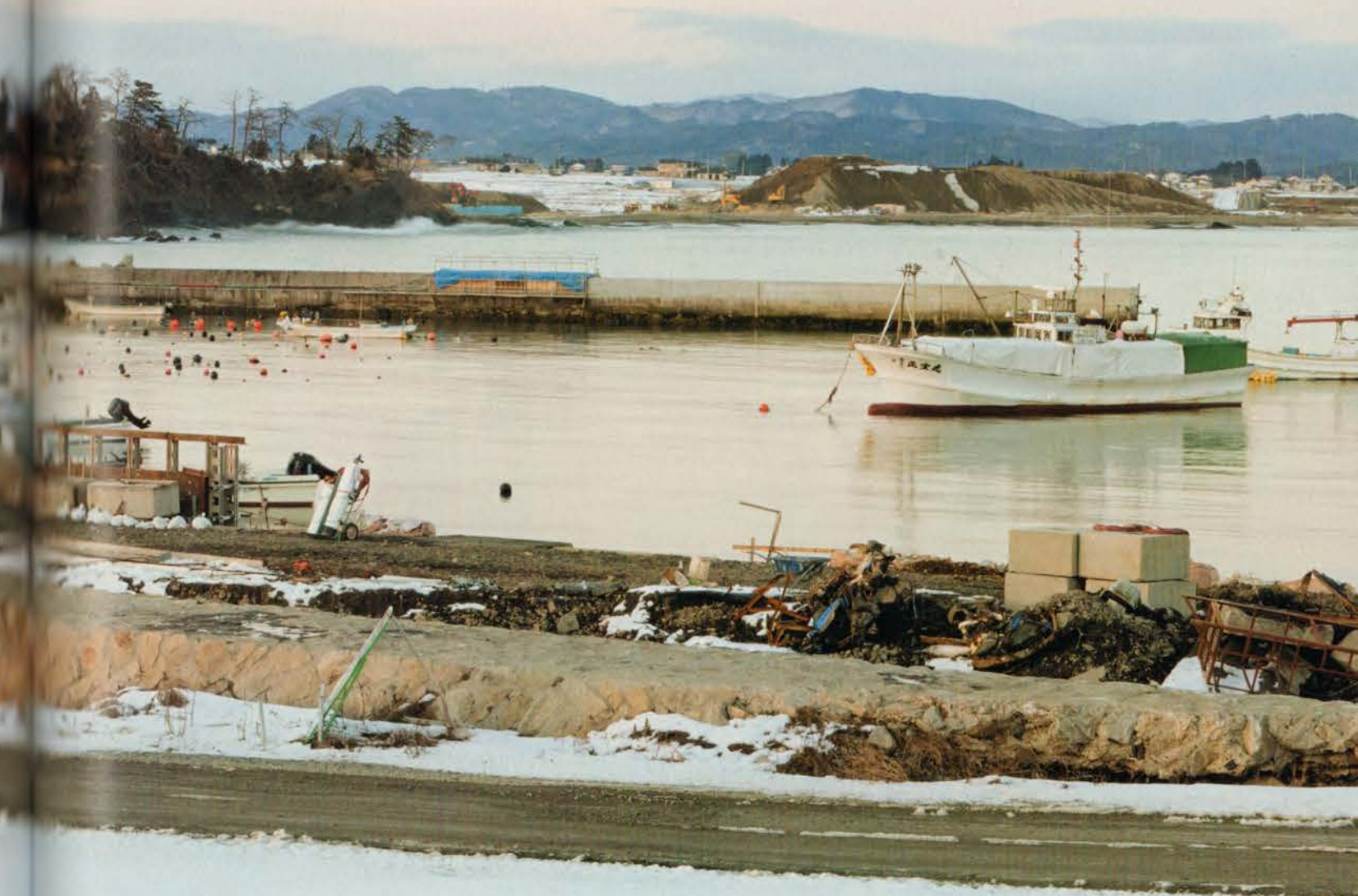
所在地 宮城県気仙沼市

HOME-FOR-ALL IN OHYA

architects: YANG ZHAO, KAZUYO SEJIMA, MASANORI WATASE



南東より見る。東日本大震災時に発生した津波によって被災した、気仙沼市本吉町大谷に建設された集会所。漁業従事者やその家族の休憩所、イベント会場、魚を販売する市場としても使用する。ロレックス社のメンタープロジェクトの一環として、設計は中国の若手建築家チャオ・ヤン氏が担当、アドバイザーとして妹島和世氏が監修した。



メンタープロジェクト

ロレックス社によるメンタープロジェクトに参加することになり、一年間、中国人の若い建築家チャオ・ヤン氏と活動することになった。それで、「帰心の会」で進めていたみんなの家プロジェクトのひとつと一緒に取り組むことにした。設計はヤン氏、ローカルアーキテクトは渡瀬正記氏、私はアドバイザーである。みんなの家は、元もいろいろな人、いろいろな国の人が参加してくれたらよいと考えていたので、とてもよい機会になったと思う。

大谷海岸の人びとと、とてもよい時間を持てたと思う。高橋工業の高橋清男さん、高橋和志さんのおふたりを中心に、地元のたくさんの人が参加してくれて、何度も話し合いが持たれた。元もと漁師の人たちの仕事場兼寄り合い所みたいな建物があったところに、もう一度、みんなの家をつくることになった。陸側からも海からも見える、いろいろなことに使われる、漁師の人たちの生活の中心のひとつとなる、新しいタイプのみんなの家ができ上がった。(妹島和世)

地域の拠り所となる開放的な家

気仙沼大谷のみんなの家は、2011年の津波によって被災した漁業者の活動拠点としてつくられた。敷地は地域の漁業活動やコミュニティの中心となる大谷漁港にある。漁師が休憩したり、妻が夫の帰りを待つ場所であったり、時には市場としても使えるように住民のみなさんと計画した。空間の大部分は外に開かれた半屋外となっていて、屋根は3つの部屋によって支えられている。その屋根の中心には空を見上げることのできるように開口を設けた。3つの部屋とベンチは中央を向いていて、それらの3つの入口を通して周辺の異なる風景を望むことができる。キッチンのある部屋は、天気のよい日には建具を開けて外と連続して開放的に使えるようにした。水辺に最も近い部屋は、縁側として楽しむことができる空間とした。そして、トイレのある部屋は空と部屋の中心に向かってトブライトをつくり、外の気配や光を感じることができるようにした。また、周囲のレベルはフォークリフトで中に入れるように内部と同じレベルにしている。

屋根の幾何学的な要素によってドーム状の空間がつくられている。天井仕上げのヒノキ合板が暖かく包み込む。また、構造の透明性によって開放的で親しみやすい空間となっている。

昼は漁師の活気とまぶしい光に照らされて、夜になると灯台のように屋根の中から暖かく光を放ち、海から漁師が戻ってくるのを待っている。

(チャオ・ヤン)



作業場よりテラスを介して東の海を見る。テラスでは竣工式のイベントとして、地元住民へ向けた演奏会が行われている。3つの部屋によって支えられた大屋根が、周囲に開かれた作業場を覆う計画。屋根の中心には三角形の開口が設けられており、各部屋に設置された縁側のようなベンチに座ると空を望むことができる。



休憩所を見る。左右2面に配置された鉄筋コンクリートの壁により屋根を支える。



休憩所は天気の良い日には建具を開け放つことで、周囲や作業場と一体の空間となる。



竣工式では、古くよりこの浜に伝わる「大谷大漁唄い込み」が、地元漁師によって披露された。この唄はマグロ大漁の吉報を浜の人びとに知らせるため、船上で櫂を打ち鳴らし掛け声とともに帰港する際の勇壮な祝い唄である。*

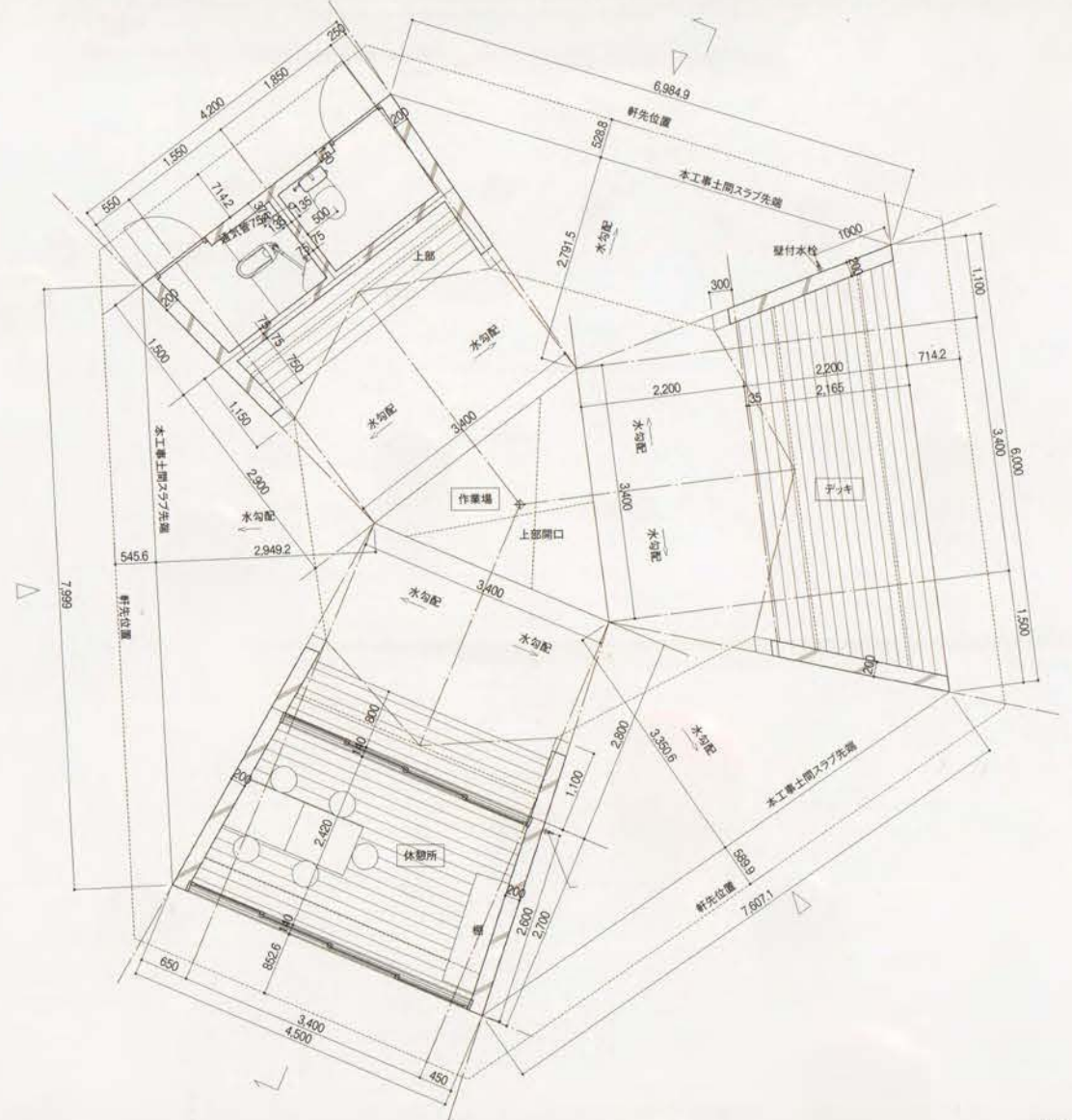


南東側夜景。

設計 建築 Yang Zhao
 妹島和世(アドバイザー)
 渡瀬正記(ローカルアーキテクト)
 構造 浜田英明
 施工 鉄建建設 高橋工業
 敷地面積 419.21m²
 建築面積 93.45m²
 延床面積 93.45m²
 階数 地上1階
 構造 鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造
 工期 2013年7月~10月
 撮影 新建築社写真部(特記を除く)
 *撮影 Hisao Suzuki for Rolex
 **提供 渡瀬正記
 ***撮影 塩澤秀樹
 (データシート204頁)



配置 縮尺1/3,000



平面 縮尺1/100

北東より見る。外に対して大きく開かれることにより、中が見えて立ち回りやすいような形状を採用。6枚の鉄筋コンクリートの壁により屋根を支えることで津波を受け止めるように計画されている。



漁で獲れた新鮮な魚を地元住民に販売する市場として使用されている。 **



フォークリフトで直接作業場へと入れるように、南東側には盛り土をし作業場と同じ高さとなっている。 **

2012年7月中旬 ロレックス社の選定によりチャオ・ヤオ氏のメンタープロジェクトへの参加決定。

2012年12月21-22日 現地視察
地元住民の方々によって提案された、海に近い(現在の敷地より一段上がった集落側)の敷地と、仮設住宅に近い敷地の計4カ所を視察。

2013年1月31日 メールにて第1案を地元住民への提示。

2月17日 第1回ワークショップ
地元住民により、新たに現在の敷地を提案され、そこで計画を行うことを決定する。海沿いの計画に伴い、作業場として使用できる、ピロティ空間を持つ建物にしたいという要望が出る。

4月2日 第2回ワークショップ
大きなピロティ空間を持つ建物を提案。模型を使って地元住民にプレゼンテーションを行う。

5月22日 第3回ワークショップ
現在に近い状態でプレゼンテーションを行い、最終確認を行う。

7月18日 地鎮祭・起工式

9月25日-10月3日 施工現場視察

10月27日 竣工式・引き渡し
竣工式には、チャオ・ヤン氏、妹島和世氏に加え、気仙沼市長、漁業組合、ロレックス社も参加。



チャオ・ヤン氏(右)と妹島和世氏(左)。 ***



上：第2回ワークショップの様子。 *** 下：模型を見ながらの意見交換。左から2番目は高橋工業の高橋和志社長。 ***



竣工式。 *

